

『暗夜行路』における近代科学と自然  
-時任謙作の過ごした時代-

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 明治大学文学部文芸研究会 公開日: 2017-05-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 宮越, 勉 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10291/18678">http://hdl.handle.net/10291/18678</a>

# 『暗夜行路』における近代科学と自然

— 時任謙作の過ごした時代 —

宮 越 勉

## はじめに

志賀直哉の『暗夜行路』（『改造』、大10・1）〔昭12・

4、現行の構成となつての、単行本『暗夜行路 前篇』は昭12・9、単行本『暗夜行路 後篇』は昭12・10に刊行された）は、読み手の視点により様々な新しい面貌を見せてくれる不思議な魅力を持つ長篇小説である。本稿は、『暗夜行路』に、発展途上にある飛行機や医学医療関係などの近代科学に関する事柄が作者のある計算のもとに描かれ、それと対置するように、自然事象である天

候に関する記述、動植物や諸風景、それらの模写である美術品などもこれも作者の意図的な計算のもとに描かれ、主人公時任謙作の精神的成長の軌跡を物語っていたことを闡明にすることを目的とする。

平野謙は、『暗夜行路』の前篇後篇を通じて意外に飛行機に関する叙述が目についたという事実に着眼し、「近代科学の一象徴たる飛行機を拉しきまつて、その全肯定からほとんど全否定への推移あるいは対照のうち、『暗夜行路』全篇のライトモチーフをうかばせようとしたのである」としたのだ<sup>1)</sup>。

阿川弘之は、『暗夜行路』の「時代設定」を探究し、

日本橋架橋工事（ルネッサンス様式の近代的な新しい日本橋の開通式が行なわれたのは明治四十四年の四月三日であったことから、前篇第一の十二の工事の実景描写は明治四十三年のものだろうとした）、飛行家マースによる日本での初めての飛行機飛行の試み（明治四十四年四月一日から四日間だったのを前篇第一の九では日本橋架橋工事より過去のこととしている）、謙作が尾道へ向かう濠州航路の汽船が「船尾にミノタワと書いた英国の軍艦」（正式呼称は「マイノートル」乃至「マイノタワー」

のようで大正元年九月に明治天皇の御大葬に際し儀礼艦として他の三艦と来日したが、この艦だけが別行動を取り大正元年十一月初旬にもう一度横浜へ入っていた）のそばを通過すること（前篇第二の一）、後篇第三の十で荻野飛行士が墜死しその遺品などが展覧されていること（荻野ではなく荻田常三郎というのが正しく、大正四年四月一日から十五日まで京都四条高倉の大丸楼上で荻田愛機の「モラン・ソルニエ」、翳風号の残骸と荻田が身につけていた遺品が一般に展示された）、後篇第四の六と七で陸軍最初の東京大阪間飛行で二機のうち一機が深草に不時着したこと（大正四年二月二十三日早朝、沢田秀と阪本守吉の二人の中尉が所沢を出発、二十六日に沢

田中尉の操縦する一番機が悪天候のため深草に不時着、阪本中尉搭乗の二番機はその日の内に大阪まで飛行を完了することが出来た）など十二例を挙げ解説し、この長篇が「五年間にわたる主人公の生活と心の遍歴とを描いた作品であることははっきりしているが、その展開の過程を編年史的に決定するのは、結局不可能に近い」としたのだった。

『暗夜行路』全篇を仔細に読めば、近代科学に関わるものは、第一次世界大戦（一九一四〜一九一八）における新兵器、医学医療関係、都市の近代化に伴う数々の文明の利器などが随所にちりばめられているのである。しかもそれは作者志賀の恣意的なものではなく、綿密な計算のもと、布置されていたと見られる。近代科学の発展でなるほど飛行機などは否定的に描かれたが、医学医療方面などは必ずしも否定的に見ていたわけではないことを、小説の展開における配置のあり方に留意し、明らかにしたいと思う。

テッド・グーセンは、『暗夜行路』における自己（主人公謙作）と自然のモチーフは、空間的移動のテーマを基盤としているとして、東京（第一）、尾道（第二）、京都（第三）、大山（第四）は、歴史を逆行するような順

序で物語のなかに登場する、という興味深い見解を述べている。<sup>33</sup>東京は近代の都市、尾道は中世文化ゆかりの深い町（しかし近代化の途上にある）、京都は平安貴族文化の舞台、大山はそれよりもさらに時代をさかのぼって苦行的な山岳信仰の栄えた土地、とするのだ。基本的に賛同できるものと思う。

私が『暗夜行路』における自然を考察する場合、まずは、頻繁にその日その日の天気記述されていることに注目したい。その日の気象状態は主人公謙作のその日の気分のありよう、行動の行きつく先の予兆にさえなっていたことがしばしばであった。次に、自然といった場合、『暗夜行路』には夥しい数の動植物が点綴されていることは言を俟たないが、例えば前篇第一における鳥類の場合、「雀」にしる「百舌」にしる、ある象徴性をもっていることに気づかされる。決して恣意的な描かれ方をしていないと思う。また、後篇第四の阿弥陀堂のシーンでは、悠悠青空の高い所を飛ぶ「鳶」の姿を謙作が見て、人間の考え出した近代科学の象徴である「飛行機」の醜さを思っている。このような場面に限らず随所に志賀直哉が得意とする対照描法が用いられているのだ。なお、謙作が自然の風景を眺めるシーンは、尾道、京都、そして大

山のシーンをクライマックスとして形成されるが、その自然描写のなかに近代科学、近代文明の産物である燈台の灯や電燈なども描かれているので、調和、不調和の観点から考察を巡らしてみたいと思う。さらに、自然の模写である美術品（山水画や花鳥画など、意外にも西洋画が出て来ない）が『暗夜行路』のなかに多く描かれていることに気づく。これらも自然事象として扱ひ、小説の展開における配置のあり方に留意し、どのような意味を持つのかを考察したいと思う。

以上のようなことから本稿は、『暗夜行路』における近代科学に関する事象と自然事象に関わるものにとりわけ着目し、作品の展開に即し鑑賞批評風に仔細に論じていくこととする。

## 一

前篇ではまず「序詞」の屋根事件に注目しなければならぬ。四つか五つの幼い謙作は、秋の夕方、人々が夕餉の支度で忙しく働いている隙に、誰にも気づかれずに一人、母屋の屋根に登った。「私としてはこんな高い処へ登つたのは初めてだった」（傍線は引用者、以下も同

様)とされる。普段下からばかり見上げていた「柿の木」が今は足の下にある。西の空が「美しく夕映えてゐる」。「鳥」がせわしく飛んでいる。美しく情緒的な自然の光景といえる。当然、幼い謙作は快活な気分になっていた。本篇に入れば、謙作がしばしば「高い処」(丘陵や山)に登っていることが確認でき、それは後篇第四の十九の大山中腹のシーンに遥か繋がるもので、「序詞」の遠心力の一つがここにも見られるのである。

前篇第一の一は、謙作が阪口の今度の小説で興奮し眠れなくなつて、深夜、講談本を読みながら、やがて「朝露のやうな湿り気を持つた雀の快活な啼声を戸外に聴いた」とされる。ここの「雀」は恣意的なものと思えない。というのは、第一の七で、謙作が吉原の引手茶屋西緑や銀座のカフェ清寶亭で遊び、赤坂福吉町の借家を「二々晩」空けて就寝し昼頃に眼を覚ました折、「戸外では百舌のけたたましい啼声がして居た」とされているからである。「雀」は、人家のある所にいる一般的な鳥で、全長十二・五〜十四cmほどの小さい鳥である。謙作は、このあと、龍岡と阪口の来訪を受け、吉原見物に行くことになるが、芸者と遊ぶのは初めてで、その初心さを「雀」の鳴き声で象徴したのだと思う。なお、ここの初

出は「雀のチツ、チョツ、チツ、チョツと云ふ啼声を戸外に聴くまでおきて居た」というもので、のちに出て来る多くの鳥類の鳴き声を擬音語使用で書かなかつたこととの整合性から擬音語を省略したと見る。一方の「百舌」は肉食性で昆虫、小鳥、爬虫類などを捕える全長十五〜三八cmほどの強い鳥で、「きいーきいーきいー、きちきちきち」という鳴き方をする。志賀の「百舌」(『不二』、大15・1)では、百舌は「地もぐりといふ蛇」と格闘し、蛇に巻き付かれてもその嘴で蛇の頭を突いて碎いていたのである。第一の七の段階の謙作は、緒方と二人で山王下の料理屋に行き、そこで老妓から「仲の町の芸者衆でお遊びになればもう本物です」という言葉を聞くのだが、すでに第一の四で登喜子や小稲と曲がりなりにも一人前に遊ぶことが出来ていて、だからこゝは「雀」でなく「百舌」の鳴き声で目覚めねばならなかつたとさえいえるのである。第一の一の「雀」は第一の七の「百舌」と有機的関連を持ち、描かれた小鳥だとせねばならない。第一の一と二は、謙作が龍岡と阪口の来訪を受け、吉原見物に出掛けるものの、その日は「どんより曇つた静かな秋の日」とされていた。夕方三人は外出し、工科大学を出て発動機の研究のため近く仏蘭西に行く龍岡が突

然吉原見物に行きたいと言ひ出した。龍岡と謙作は「電柱の多い仲の町」(近代化が進んでいることを表している)まで出て吉原見物の目的自体はほぼ終えていて、遅れて来た阪口に龍岡が「俺達はもう帰るよ。一緒に帰るかいい？」と言ひ、二人が大門の方に歩き出した時、「ポツリ／＼雨が落ちて来た」のである。三人とも疲れていたこともあって、西緑という引手茶屋で休むことになるが、「雨」が降り出さなければ、西緑に入ることもなかったとさえ思われる。以後、前篇第一の世界は「雨」降りのシーンが頗る多いことが特徴となっている。

さて西緑の二階座敷は、「白熱瓦斯のケバ／＼しい強い光が照り反し」、「それとは凡そ不調和に、文晁ぶんせうとした、汚れ切った横物の山水」が置き床に掛けてあったのである。ここに近代科学の産物である「白熱瓦斯」灯が出て来るが、石油ランプから電燈への過渡期に使われたものであった。電燈は当時、電燈会社が夕方の一定の時刻になってから送電していたのであり、第一の十で謙作が氷川神社から帰り、戸外は「霧のやうな雨」で、室内で宮本と将棋をさして盤上も薄暗くなった頃に「電気が来た」という叙述が見られるし、第二の十で尾道から帰った謙作が耳鼻咽喉専門の丁病院に診察時間外に出掛けた際は、

その診断中に医者は「電気はまだ来ないかね？」と言っていたのである。一方、「ケバ／＼しい強い光が照り反す」「白熱瓦斯」灯と対照をなすのが谷文晁の汚れ切ったとされる「山水」画である。が、謙作は座敷と不調和を感じ気持ちが悪く落ち着かないのである。十一時を過ぎ、謙作は帰りたい気持ちを龍岡に打診したが、二人は一緒に戸外を眺めた。「雨はひつきりなしの本降りになつて了つ」ていて、「一台の自動車<sup>自動車</sup>が雨の糸を其強い光りで銀色に照らしながら通り過ぎた」のである。ここにも近代科学の産物である「自動車」が出ているがそのヘッドライトの強い光は「雨」の糸を銀色に照らすというある種の美しい光景を現出させていたといえる。

こうして有耶無耶に腰を落ちつけることになり、登喜子らと、トランプの二十一、軍師拳の遊び、ニッケル渡の遊びに至り、「まぶしい程の瓦斯の光の下」で、謙作は阪口に「へえ、其熊のやうな毛の生えた手を両方」と言われ、拘泥していたその武骨な空の手を膝の上で開け、不愉快を感じたのである。やがて「雨」も小降りになり、夜が明け始め、「瓦斯の光りが段々に間が抜けて来た」。不愉快な思いのなか、謙作は兄信行を思い、朝六時半過ぎに、西緑から「電話」を掛けてみたが、まだ寝ている

ということであった。ここで近代科学の産物である「電話」が出てくるが、当時は普及率の極めて低いものであった。明治四十二年で電話架設料は二百円（加入は十万超、ちなみに銀行員の初任給は四十円）、大正五年で架設料は三百十五円だったのである。このあと、「電話」はしばしば小説のなかに出て来るが、迅速なかつ便利な連絡手段として、有用なものだったとせねばならない。なお、謙作は借家に「電話」を架設しておらず、第一の七で謙作は「直ぐ近所の本屋へ行つて西縁に電話を掛けてみた」という叙述部があるのだ。そして朝の九時頃、三人は無印の番傘を二本貰い受け、「しとくと降る秋雨の中へ出た」のである。

第一の三の冒頭部で、昼頃、疲れ切つて自宅に帰った謙作は、「其一週間程前から飼つて居る仔山羊」（小さい囲いの中にいる）に、前日からの「雨」で地面にくっついている「黄色い桜の葉」を五、六枚拾ひ、食べさせてやったのである。「仔山羊」から精神的慰藉を受け、少し快活な気分になった。なお、この「仔山羊」は第一の十二で再び登場するので、のちにその点描の意味を考えてみたい。

その翌日は、「風の吹く不快な日だった」とされるが、

帝劇のマチネーに妹の咲子と妙子を連れて行き、幕間で石本に会い、やがて石本に連れられ謙作は築地の待合に行く。その座敷は、茶がかつていてしかも小細工がなく、前の小さい庭も品よく出来ていた。「床」には「京都の画かきの稻荷山の軸」が掛けてあり、この画かきの画を謙作は積極的に嫌っていたが、こういう家の座敷には悪くなく、「殊に水盤すゐばんに生けた秋草」が「其稻荷山の山路やまぢりに合つて居た」とするのである。この築地の待合の座敷は先の西縁の座敷と対照を成す。そして、普段は嫌っている画家のものとはいえ、京都深草にある伏見稻荷の背後にある稻荷山の自然を描いたこの軸物は、謙作の独自の美術鑑賞眼によいものとして受容されたのである。だから、石本の「くどくど」した謙作（第一の五で回想される愛子事件で人間不信に陥っていた）の結婚話にも「もう閉口だ」ときっぱりと言い、不快は尾を曳かず、二人には笑いさえ齎されたのである。

第一の四は、登喜子への淡いイルージョンを抱く謙作が朝目覚めた時に戸外に「烈しい雨音」を聴くとこんな日に西縁に出掛けるのはどうかと懸念するが、夕方には「雨」はすっかり上がり、「美しく澄み透つた空」が見上げられるなか、西縁に出掛けたのである。約束した石本

は都合で来られなかったが、謙作は登喜子（この日にイ  
ルジョンはほほ褌めた）、それと対照する小稲らと快  
く遊ぶことが出来た。一時頃に謙作は俵で帰る。「月の  
いい晩で、更け渡つた雨上りの二重橋の前を通る時など  
は彼は流石に晴々としたいい気持ちになつて居た」のであ  
る。その日の天候、その時々々の氣象状態に左右される謙  
作の気分の動きが巧みに描かれているのを確認できる。

第一の六は、謙作が友人緒方と西緑や清賓亭を遊び回  
り、「二夕晩家を明けた」時の有様を描いている。染井  
墓地に仲間たちとかなり以前に死んだ友人の墓参をした  
あと、謙作は緒方と西緑に行く。「戸外には秋らしい静  
かな雨が降つて居た」とされる。小稲が「下谷の芸者衆  
が白狐に自動車の後押をされた」と云ふ話を「信じて居  
ない事を殊更真顔」で話すので謙作は馬鹿々々しく思う  
のであった。この時代、都市部に住む人間には「狐」の  
都市部への出没はもう非近代的なものとして信じられて  
いなかったことをうかがわせている。西緑で一晩を明か  
し、翌日の日暮れにようやく「雨」はあがった。謙作と  
緒方は、日本橋の方へ出ることにした。「電車」に乗り  
小伝馬町で降りると、二人は人道を日本橋の方へ歩いて  
行った。「雨に濡れた往来が街の灯りを美しく照りかへ

して居た」とされる。東京でも近代科学の産物である  
「街の灯り」が「雨」上がりという自然現象とマッチし  
美しい光景を醸し出しているのである。その後、二人は  
銀座をぶらつき清賓亭でお加代らと遊び、十二時近くなっ  
てまた西緑へ行き、また一晩を過ごしたのである。その  
明け方、帰途につく謙作は、「雨後の美しい曙光」が東  
から段々に湧き上がるのを見ると、「十年程前の秋、一  
人旅で日本海を船で通つた時、もう薄く雪の降りてゐる  
剣山の後ろから非常な美しい曙光の昇るのを見た、其  
時の事を彼は憶ひ出した」というのである。ここは、こ  
の日の「美しい曙光」もさることながら、十年程前の  
「剣山の後ろから非常な美しい曙光」が一層美しい自然  
の景物としてあり、遠く第四の十九の大山の曙光へと繋  
がるものとなっている。

第一の七は、先に述べたように、「百舌」が重要な意  
味を持つと思うが、その「百舌」は、謙作が雨戸を一枚  
繰ると、「隣の梧桐の天辺」から逃げて行つたのである。  
「百舌」の飛来は「梧桐」（アオギリ科の落葉高木でその  
高さは十五mにも達する）だからこそリアリティーがあ  
る。その日は、「実にいい日」で「風もなく秋らしい軟  
かな日差しが濡れた地面に今梧桐の影を斜に映して居た」

のだった。謙作は風呂呂に入るが、「氣持のいい日光が硝子窓を通して箱風呂の底まで差込んで」いて、「湯気が日光の中で小さな無数の粒になつてモヤ／＼と動いて」いたのである。太陽の光と風呂の湯気、氣持ちが和む自然現象を描出しており、謙作の穏やかな心境もうかがえる。だが、その後も謙作の西緑や清賓亭通いは続き、千代子という芸者にも魅かれるものを感じ、「全体、自分は何を要求して居るのだらう？」と自問自答（性欲衝動の昂進を自覚していたらう）するのであった。

第一の八は、清賓亭のお加代との關係が中心に描かれているが、「のりの利いた厚いテーブル・クロスに緑色の酒がこぼれたのが白熱瓦斯の下で一層美しく見えた」という情景も書かれている。「白熱瓦斯」に照らされたなかで、謙作は肉感的なお加代と接吻の真似をしたりするのであった。

第一の九は、「其日は寒いばかりでなく時々思ひ出したやうに細い雨が止んだり、降つたりする日だつた」とされる。そして謙作は長い間怠っていた日記をつけ始める。芸術の天才に就いて不死の仕事を思うばかりでなく、科学の天才に就いてもそう思うとする。人類の運命（やがて滅亡する）は地球の運命（寒冷化する）に殉死する

とは限らない。人類の永生を願ひ、地球の運命に反抗するという点で、「飛行機」（マースという飛行機乗りが初めて日本で飛行機を飛ばした日の感動も思い出し、その發展で人類に適した地球以外の天体への移動も可能となる）は肯定されるものとなる。これを須藤松雄は「対立的自然関連」といい（その対概念を「調和的自然関連」とする）、鹿野達男は「ヒコーキ空想」としたのである。

謙作が「誰かが科学上の偉い新発見をしたといふやうな新聞記事を読む。其時にも自分は泣きたい程、感動する事がある」としていることに注目したい。キュリー夫妻がラジウム、ポロニウムの発見でノーベル物理学賞を受賞したのは一九〇三年のことで、マリイ・キュリーがラジウムの分離でノーベル化学賞を受賞したのが一九一一年（明治四十四年）であった。だからこの日記のなかで「キュリー夫妻」のことは称賛されたのである。

第一の十は、日記を書き始める前に信行の来訪があり、咲子に変な恋文を寄越した若者がいて、氷川神社境内で面談したいとしていたが、それを懲らしめに「丁度雨は止んでゐた」午後二時に氷川神社に出掛けて行つたのである。結局それらしき青年は見当たらず、帰宅し、戸外では「又霧のやうな雨が降り出した」なか、友人宮本と

将棋を五、六度もさし、やがて二人は外出、銀座へと出た。「街燈と並んで立つた柳の細い枝が風に揺れながらキラ／＼と美しく光つてゐた」と描写されている。「街燈」(近代科学の産物)と並行して植えられた「柳」(自然のもの)は調和し夜の銀座を美しいものにしてゐる。二人はやがて緒方と合流し清賓亭へ行く。ここで、毎日屋前十時頃銭湯に行くというお加代がある時、「瓦斯会社の工夫」が「損じた瓦斯燈」を直すのに愚図々々してゐるので湯槽を出られなかったというような話を自身でも興味を持って話したことなどから、謙作はお加代に安価な感じを受け、そのイリュージョンは褪めてしまったのである。

第一の十一は、「或曇つた薄ら寒い日の午前」に謙作は自分から放蕩(遊郭行)を始めたことから始まる。放蕩を始めてから次第にお栄(幼年時に謙作が引きとられて行つた祖父の妾で祖父の死後も同居するいわば育ての親だが謙作は異性としての魅力を感じている)を意識するようになる。謙作の悪い精神の跳梁は「播摩」の夢を見させる。阪口はその淫蕩性が昂じ、それをすれば死ぬという「播摩」(性交の体位のひとつとされる)をして到頭死んだと宮本が知らせに來た。夢の解釈は難しいも

のがあるが、性欲は内在的な「自然」のもので、阪口が性欲に溺れ死んだのはその「自然」からの制裁ともいえるが、その阪口の徹底ぶりに謙作は異様な感動さえ覚えたのである。が、謙作はエスカレートする性欲にブレーキが掛けられるだけの理性を持っていた。そもそも阪口は墮胎を描いた小説を書いていた(第一の一)。墮胎は「自然」の意思に反する。この点からも阪口は「自然」から制裁を受けたとしていいだろう。が、さらに夢の続きがあつて、「戸外は静かな月夜」で、「木の葉一つ動かない、しんとした夜景色」のなか、屋根の上で頭だけ大きく胸から下がつぼんだように小さく恐ろしいよりはむしろ滑稽な感じのする七、八歳の子供くらいの大ささの魔物(淫蕩な精神の本体)が一人安っぽく跳つているその「影」を見て、安価なものを嫌う謙作は悪い精神の跳梁を受ける状態から脱却できたのである。

第一の十二は、まずは、「仔山羊」だと思つてゐるうちに、二、三ヶ月が経ち、今や発情期にある山羊となっていることを語る。これは謙作の性欲昂進のパロメーターであると同前述べたことがある。それとは別に、謙作はお栄から遠ざかるために山陽道の何処か(のち信行に尾道を勧められる)で一人暮らしを計画しており、山羊を

どうするかに困り、お栄との会話のなかで「伝染病研究所」へ売ると殺しにやるようなものだ（動物実験に供される）と言ったことに注目したい。赤痢、ペスト、コレラ、チフスなどの伝染病で多くの罹患者、死者を出していた時代のことである。福沢諭吉、森村市左衛門らの援助で、東京の芝公園内に大日本私立衛生会の「伝染病研究所」が設立されたのは、明治二十五年十一月三十日のことであった。所長は北里柴三郎であった。のち大正三年に文部省移管に抗議し、北里所長らが辞職、大正五年に東京帝大医学部附属研究所となったのである。ここは芝公園内にあった「伝染病研究所」を指しているとしていいだろう。それはともかく、『暗夜行路』で初めて近代科学の一分野である医学に関わることが出て来たのである。医学の進歩は人類に幸福を齎す。山羊の行方は分からずじまいだが、ここに伝染病対策という医学医療のことが出て来たことは、今後、『暗夜行路』は医学医療関係のことがしばしば描かれるので、ことさら注目していいことだと考えたのである。

同じ第一の十二には、謙作が日本橋にある火災保険会社から退社時（当時は午後四時）に出て来るはずの信行を待つシーンがある。「年の暮れ近い夕方の忙（せ）しい室町

通りで、電車は北からも南からも絶えず来ては其前で留まり、車掌が同じ事を云つて、又動いて行つた。俣、自動車、荷馬車、自転車、それから間々（あひだく）を縫つて人間が四方へ勝手な速さで歩いてゐた。犬も通つた」と都会の雑踏の有様が描かれている。このうち「電車」「自動車」「自転車」は都市の近代化を促進させるもので、「俣」「荷馬車」「犬」は時代遅れのもので、この室町通りの光景は近代都市化への過渡期を表しているといえよう。また、謙作と信行が日本橋の飯橋から本橋工事の現場風景を眺めているシーンがある。とりわけ「土台を築くために囲をした、其中へ浸み込む水を石油エンジンで絶えず汲み出して居る。亜鉛板の変に反りかへつた屋根から、細いのと太いのと二本の煙突が出てゐて、細い方はスポツスポツと勢ひよく蒸気を吐く度震へて居た」と描写される部分に近代科学の力を感じさせるものがある。

## 二

第二の一は、「冬にしては珍しく長閑な日だつた」という天候の叙述から始まる。謙作は、お栄と宮本に見送られ、船で横浜港を出発した。「船は一方の推進機で水

を後ろへ、もう一つのでそれを前へやり、時々はそれを止めなどしながら段々と岸壁を離れて行つた」と描写される。もう少し時間が経って甲板に出た謙作は、「艦尾にミノタワと書いた英国の軍艦」が海面に置かれているのを見、さらに「推進機にかき廻され、押しやられる水をほんやり眺め」、「それが冴えて非常に美しい色に見えた」とする。「推進機」（船舶の場合、スクリュープローラ）は近代科学の産物である。これに謙作は大いなる関心を抱いていたとしていい。濠州の若い外国人との会話などがあって、また甲板に出ると、「夕方の曇つた灰色の空に富士山がはつきりと露はれて」いるのを見、北斎の構図的な富士（浮世絵）を連想したのである。「午前

の長閑な霞んだやうな天気」から「どんよりと薄ら寒い曇り日」へと変化していたが、「富士山」を遠望できたのは幸運なことだった。「富士山」を是非見たいと言っていた濠州の若い外国人も見ることができ満足したようだ。謙作は最近の寝不足を解消するため寢床に入り眠ろうとするが、船室が船尾に近いので、「舵を動かす太い鎖」が絶えず「グロツグロツと変な響」をたてる、「ダン／＼／＼と云ふ汽缶の音」、それに「推進機」に押される「シヤ／＼と云ふ水音」も聴こえ、眠れず、多少

の船酔いさえ感じたのである。ここでの近代科学の産物である「汽缶」（ボイラー）などは睡眠の妨げとなる不快なものとしてあるのだ。

寒い晩になって、謙作はもう眠れず、信行、緒方、お栄、宮本らに葉書を書くが、飛行機の製作、殊にその発動機の研究に熱心な龍岡にも巴里大使館気付で葉書を書いたのである。まだまだ、謙作の近代科学の進展を願う思いは持続されているとしていい。が、「彼の頭の上には大きな旋風器が彼を見下ろしてゐた」という擬人法的表現もあり無気味である。こうして、謙作は外套にくるまり夜の甲板に出るが、「船」は「風」に逆らい、黙って「闇」へ突き進み、それは「何か大きな怪物」のように思われたとする。この擬人法的表現の描写も無気味さを感じさせる。謙作自身は無自覚なのだろうが、ここでは近代科学の産物である大きな船舶のマイナス面がすでに表されていたと読むべきだろう。現に、「自分だけが、一人自然に對し、かうして立つてゐる。総ての人々を代表して」という誇張された気分には捕らわれ、「何か大きな／＼ものの中に自身が吸ひ込まれて行く感じに打克てなかつた」とされているのである。

第二の二は、船が神戸に着き、汽車で尾道に向かうシー

ンから始まっている。「塩屋、舞子の海岸は美しかった」とされ、「夕映を映した夕なぎの海」に、岸近くに小舟を浮かべ胡坐をかいて網を繕っている船頭、白い砂浜の松の根から長く網を延ばしもう夜泊の支度をしている漁船などを、謙作は楽しい気分で見つめていたのである。尾道の宿屋で部屋から眺めた風景は、「何十隻といふ漁船や荷船が所々にもやつてゐる。そしてその赤黄色い灯の美しく水に映るのが、如何にも賑やかで、何となく東京の真夜中の町を想はせた」というものであった。夜の尾道は東京のそれと大差はないと感じている。なお、海の方で「ピヨロツ」と美しい啼声だか音」がしていたが、それは「船の万力」（船で物を引き上げるのに使う小さな滑車で自然のものでなく人工のものである）であった。翌朝、謙作は「千光寺と云ふ山の上の寺」へと向かう。掛茶屋から「前の島を越して遠く薄雪を頂いた四国の山々」が見られ、「瀬戸海の未だ名を知らぬ大小の島々」も見られ、そういう広い景色が謙作には物珍しく愉快だった。しかし「かう云ふ見馴れない景色を眺めて居ると、やがてこれにも見厭き、それがいい景色だけに却つて苦になりさうだと云ふやうな気がした」というのはどういふことなのだろうか。長閑な「いい景色」は単調で変化に乏し

い。謙作は仕事目的でこの尾道にやって来たのだが、早くも仕事はいずれ挫折をきたすということを示唆していかねたろうか。やがて千光寺の鐘樓の所から市全体を眺めている。「山と海とに挟まれた市は其細い幅とは不釣合に東西に延びて居た」とされる。謙作は借家捜しもしていたが、四国への小旅行を終え、千光寺中腹の家を借りることにしたのである。

第二の三は、謙作の寓居である三軒の小さい棟割長屋の一番奥から寝ころんでいて見える「景色」を描いている。前の島に「造船所」があり朝から「カーン」と金槌」を響かせている。同じ島に石切り場があり石切人足が絶えず唄を歌いながら石を切り出しているその声が聴こえて来る。夕方、狭い濡縁に腰かけていると、下の方の商家の屋根の物干しで、「沈みかけた太陽」の方を向いて子供が棍棒を振っているのが小さく見える。その上を「白い鳩」が五、六羽せわしそうに飛び廻っている。そして「陽を受けた羽根が桃色にキラ」と光る」のだ。六時になると、上の千光寺で刻の鐘をつくのだが、「ごーん」となると直ぐゴーンと反響が一つ、又一つ、又一つ、それが遠くから帰つて来る。その頃から、「百貫島の燈台」が光り出し、点滅する。「造船所」の「銅を溶か

したやうな火」が「水」に映り出す。十時になると「多度津通ひの連絡船」が「汽笛」を鳴らしながら帰って来る。「舳の赤と緑の灯り、甲板の黄色く見える電燈、それらを美しい縄でも振るやうに水に映しながら進んで来る」のだ。もう市からは何の騒がしい音も聴こえなくなつて、船頭たちのする高話（大きな声で話すこと）の聲が手にとるやうに謙作の所まで聞こえて来る。このやうな多様な聴覚、カラフルな視覚表現で尾道の素晴らしい「景色」を現出させている。近代科学の産物と自然が調和した美しい「景色」だといえよう。また、謙作は、これまで近代科学の産物である「瓦斯ストーヴ」と「瓦斯のカンテキ」（七厘）を一緒に焚き、寒さを凌いで、「長い仕事」（自伝的長篇としていい）に取り掛かったのである。が、生活の短調さと孤独感から一ヶ月後には仕事を中止するより仕方なくなるのだった。

第二の四は、「春めいた長閑な日だった」で始まる。冬眠明けの「大きな蜥蜴」が大儀そうな身体を半分出して、じっと「日光」を浴びていた。謙作は「四国の山々」を眺め、ふと旅を思い立つ。翌日の旅立ちの日は「薄日のさした、寒い、いやな日」だったが、やはり出掛けることにした。この天候はこの四国への小旅行がよくない

ものとなる予兆だったかもしれない。多度津行ききの「船」は「島と島との間」を縫って進み、「島々の傾斜地に作られた麦畑」が「一ト畑毎に濃い緑、淡い緑」と区切りをつけて、「曇つた空」の下にビロードのように滑らかに美しく眺められたのである。それから「島々の峯の線」がいかに力強く美しく眺められた。これに関連して「市の瓢箪屋で見た割れ瓢の割れ目の線」を思い出し、「自然の作る線、これには矢張り共通な力強さ、美しさがある事に感服した」とするのである。「自然」が創造する力強さ、美しさが強調されていることに注目したい。「阿伏兔の観音」（中世十六世紀、元亀年間（一五七〇）一五七三）に毛利輝元が観音堂を建立したという）が見え出し、「如何にも支那画」を見る心持ちであった。「鞆の津」に「船」は止まるが、傍に横たわる「仙酔島」を「氣持のいい穏やかな島」とするものの、「空模様」の關係で「月見」は断念し、「船」に乗り続けることにした。謙作の身体が冷えて来て、不愉快になって来る。船室に「レコード」と「蓄音器」が運び込まれて来るが、「レコード」から「浮かれ唄」が流れると、「ダン／＼／＼といふ汽缶の響、ぼう／＼と甲板で鳴らす汽笛、船の胴を打つ波音」と入り混じって、不調和にその「浮かれ唄」は浮

かれていたのである。これには謙作は耐えられなかった。甲板に出た謙作は、象頭山の空想を巡らすことになる。ここは、近代科学と自然の関係を描いた重要なシーンと思われるので仔細に検討してみたい。謙作は事務長が言った「象の頭に似とる云ふので、それで象頭山」とした山より「其前の山」が「もつと象の頭に似てゐる」と思い、大地に埋まっている「大きな象」が全身で立ち上がった場合を空想した。それから人類とその巨大象の戦争を思う。「大砲」「地雷」は、その皮膚の厚さが一町(約一〇九m)くらいある象皮病のため用をなさない。食糧攻めにするにはその巨大象の朝めしと昼めしの間が五十年なのでどうすることも出来ない。人類はその巨大象を何とか殺そうと詭計を弄する。とうとう巨大象は怒り出す。都会で一つ足踏みをすると一時に五万人がつぶされる。「大砲」「地雷」「毒瓦斯」「飛行機」「飛行船」、そういう「武器」で巨大象を攻める。が、巨大象が鼻で一つ吹けば「飛行機」は「蚊」よりも脆く落ち、「ツェッペリン」は風船玉のように飛んで行ってしまふ。巨大象が鼻に吸い込んだ水を吐けば「洪水」になり、海に一度入って駆け上がって来ると、それが「大きな津波」になるのだった。ここには明らかに第一次世界大戦が反映されている。

第一次世界大戦史に関する最新の著書によると、ドイツ軍が史上初めて本格的に「毒ガス(塩素ガス)」を戦場で使用したのは一九一五年四月二十二日であった。ただし、ガス漏れの危険もあり現場では著しく評判の悪い兵器だったという。その後一九一五年の九月には、フランス軍もイギリス軍もドイツ軍に対して「毒ガス」を使用した。「毒ガス兵器」はその後、改良がなされていき、両陣営とも「毒ガス兵器」を大いに使用するようになったという。「飛行機(航空機)」は「新兵器」として登場したのである。第一次世界大戦は、航空機が本格的に使用された最初の大規模な戦争になったとする。「飛行船ツェッペリン」はドイツが一九一四年八月にベルギーを、一九一五年五月からはロンドン空襲を始めたという。さて、謙作の象頭山の空想では、巨大象により人類による「毒瓦斯」「飛行機」「ツェッペリン」などの「兵器」は用をなさなかった。そもそもこの巨大象は何者なのか。それは「自然」の化身だと思う。「自然」は人類の傲慢さに怒り、強風や「洪水」や「津波」を人類に齎したのである。近代科学は「自然」には勝てないのだ。ただ、謙作がその巨大象になっていることをどう解釈したらいいのだろうか。一つは、近代科学の象徴である「飛行機」

などが「戦争」の「兵器」となることへのプロテストともいえ、また、人類のための芸術（文学）の仕事に頓挫した謙作の詭計を弄するような人類を破壊してしまおうという破れかぶれの想念の仕業とも考えられるだろう。

第二の五は、謙作が金刀比羅（室町初期以降、金毘羅信仰が盛んとなり、江戸時代に入って金毘羅詣でが全盛を極めた）に泊まり、翌朝、金刀比羅神社（金刀比羅宮、多度郡琴平町の象頭山（五二一m）の中腹にあり、一三六八段の石段がある）へ行き、日頃嫌いな「狩野探幽の雪景色を描いた墨絵の屏風」をいと思ったり、本社へ行くまでの「道」周辺に「人工の美」を見出したりしていることから始まる。本社からさらに奥の院へ行くが「人工の美」は皆無で、人手の入らない自然の山の大きな木の「その木の肌」を気味悪く思い出すと、その「弱つた神経」はひどく脅かされたという。謙作の精神状態はよくない。人手の入らない自然の山の木の肌にその神経は脅かされていることに注意したい。午後は高松へ行き、栗林公園も見だが何の感慨も抱かなかったようで、町の洋酒洋食品の店に入り、見ずばらしい姿（二十年も前に出来た祖父の着古した汚い黒綾羅紗の二重廻などを身につけている）でありながら肉の缶詰に選り好みをし

たのだった。が、高松から屋島に行き、「高松からずつと続いてゐる塩浜が段々下の方に」見えてくると、「塩焼きの湯気が小屋の屋根から太い棒になつて、夕方の穏やかな空気の中に白く」立っていて、「それが点々と遠く続く」光景に接すると、「彼の物憂い沈んだ気分」もさすがに慰められたのだった。ここには俯瞰する瀬戸内地方の美しい塩田の続く浜（中世から近世にかけて盛んになった）が描かれている。謙作は、屋島では「下の方に海を望む、小松林の中の宿屋」に泊まる。その「崖の上の小さな風雅作りの離れ」の部屋から、「夕靄に包まれた小豆島」、近く遠くの「名を知らぬ島々」を眺め、遙か眼下に昔風な和船の帆柱の「灯り」や、沖から寄せるうねりの長い弓なりの線を夕闇の中に眺めるのだが、その心は不思議に楽しまなかつたという。謙作の精神状態はよほど悪いとしなければならぬ。こうして深い孤独感のなか、お栄との結婚を決意するのだった。

第二の七には、お栄が謙作の求婚を断つたことと謙作が母と祖父との不義の子であったことを知らされた（第二の六）あと、尾道の倉庫町の蠣船料理に一人で入る場面が描かれている。「低い窓障子」を開け外の景色を眺めるが、「暗い往来」の中、芸者が三、四台続いた俵の

上で互いに浮かれた高調子で何か言い合いながら通って行くのが見られた。暗いトーン、これは、後篇第三の十三で謙作が直子と結婚した直後に蠣船料理に行き、祇園の「茶屋々々の燈り」、四条の「げばくしい橋」、その先の南座などの「燈り」が「まほゆいばかりにきら／＼と川水に照返して居た」光景と見事な対照を成している。謙作のその時の精神状態とその場の光景が合致し、暗と明の対照をモザイクとして形成していたのである。

第二の九で、謙作は中耳炎に罹るがその原因に天候が関わっていた。或る夜、「宵に曇つてゐて、夜中から急に晴れ渡つた夜」があり、その「蒸暑かつた夜が明け方になつて急に冷え／＼して」来て、薄着で寝ていたため風邪を引き、翌日は終日水漬を飲んで暮しそれを強くかんだのが少し耳の方へ入ると、耳が痛み出したというのである。翌朝、医者に行くと、中耳炎のなりかけたと言われ、早く専門医に見て貰う方がいいだろうと言われ、「少量のオリーブ油と薬法の薬」とをくれた。尾道には耳鼻科専門の医者がいなかったこともあって、東京に帰ることにしたのだった。帰途は汽車によるもので、「春としては少し蒸暑い日」だったが「外を吹く強い風」が気持ちよく窓から吹き込み、二人の子供を連れれた若い軍

人夫婦の一行が席の近くにいて、男の児が窓の外に殊更に首を突き出し、大声で唱歌を唄い、「風」(自然)に逆らい、「わざく／＼野蠻な銅鑼声」を張り上げるところに子供ながらに男性を見る気がし、謙作は何となく愉快だったのである。いわゆる「ヒコキ空想」は持続されていたとしていい。夕方に姫路で下車し、京都行き急行まで四時間もあったので、俤で白鷺城(姫路城)を見に行った。広場の入り口から「老松の上に聳え立つた白壁の城は静かな夕靄の中に一層遠く、一層大きく眺められた」のである。姫路から夜行寝台急行に乗り、翌朝「富士」を見、「巖積の多い函根の山々」を見ても謙作は何となく嬉しかったのである。

第二の十では、東京に戻った謙作が近くの「耳鼻咽喉専門の丁病院」へ行き、手術(医者の診た通り手軽く済んだ)を受けたシーンが描かれ、医学医療方面の事柄も確かに書かれていた。また、信行の父が嘗て或る鉄道会社を興した際、費用のかかる高架線ではなく地上線を敷こうとして町民の反対を受け、譲歩して高架線にしたことが語られている。鉄道の高架線は近代都市化の漸進を表すもので、この場合、近代科学の建築学分野の発展を促したともいえるだろう。

第二の十三は、大森にお栄と引越していた謙作は、「湿気の強い南風の烈しく吹くやうな日には生理的に」「半病人」になっていて、その生活もまた乱れていた、としている。謙作は氣候の影響を受けやすい。こうして、「それは蒸暑い風の吹くいやな日」とされ、外出した謙作は、自身を惨めな人間に思い、「悪い場所」だけが彼のために戸を開いているとして、そこへと足を運ぶのだった。第二の十四は、立て続けに二人のプロステイチュートと遊んだその日のことから描いている。が、その翌日は、「根こそぎ、現在の四囲から脱け」出て、「何処か大きな山の麓の百姓」、しかも「その仲間はずれ」なら一層よく、「或る平凡な醜い、そして忠実なあばたのある女」（傍点は志賀）を妻にして安気に暮らすという想念を抱いたり、銀座を歩いていて、「松が叫び、草が啼いてゐる高原の薄暮を一人、すうつと進んで行く」、そのような理想的な心の境地に憧れたりするのだった。これは、謙作が東京の都会生活に疲れ、やがて実現される後篇第四の後半部分、大山行の旅と大山生活を無意識的に憧憬したものではなかったかと読み取れるのである。そして、謙作は、前日の何故か時々京都訛りを真似るプロステイチュートの「ふつくらとした重味のある乳房」

（生命ある者を育む自然形象）を柔らかく握り、軽く揺すり、「快感」以上のものを感じて、「豊年だ！ 豊年だ！」と言ひ、さらに幾度か揺す振り、謙作の「空虚」を満たしてくれる「何かしら唯一の貴重な物、その象徴」として感ぜられたのであった。女性の「乳房」は男性を癒す自然のものとして機能しているのである。

### 三

後篇第三の一は、前篇から一ト月後の、季節を夏、舞台を京都に移して始まっている。東三本木の宿で過ごす謙作は、「朝涼」のうちに貸家捜しに出掛けるが、いつしか寺廻りとなり、午後はその宿の暑い小さな座敷でごろごろして暮らし、夕食後は敷居に腰を下ろして、近く（新しく出来た河原の広い道で男女の労働者が川底から揚げて来た砂利を大きさに従つてふるひ分けて居る）様子、「所々、草の生えて居る加茂川」、「対岸の往来」、「人家」、その上に「何本かの烟突」、遠く、「真正面に西日を受けた大文字から東山、もつと近く黒谷、左に吉田山、そして更に高く比叡の峰」その視野の範圍の光景が「一眸の中に」眺められたのである。ここには、前

篇第一の十二の日本橋の工事現場以来ともいえる労働者の働く様子も点描され、遠近法的描写で、人間の営みと調和するように山々などの自然形象が描かれている。

こうして謙作は河原に出て、「若い美しい女の人」(直子)を見初めることになるのだが、都合三回見かける個々のシーンに着目してみたい。軒を並べた河原の家々の一軒に、毎日は見かけない「若い美しい女の人」がその縁で「土鍋をかけた七厘」(前篇第二の三の「瓦斯カンテキ」と対照的に前近代的なものといえる)の下をおおいで「火」をおこしているためか、その「豊かな頬」(先に「豊年だ! 豊年だ!」とした「乳房」に繋がるものがあるだろう)が赤く色づいて健康そうで快い感じに映ったのだった。二回目は荒神橋の下まで行って引返した折で、その女の人の快活な響きの声を聞き、「いい着物」を着ていることも分かり、宿に帰っても落ちつけず、やはり幸福な気持ちになっていた。三回目は、湯上りらしく白い浴衣を着て縁に出て坐って老女(病院通いをしているN老人の細君)と涼んでいた。部屋の「明かるい電燈」の「光り」を背後にして川の方を向いているので、顔は見られず、謙作がその場を去って対岸に出ると「遠く影絵のやうに二人の姿」が眺められたのである。第一

の二の西緑の「白熱瓦斯のケバくしい強い光り」や第一の八の清寶亭のこぼれた緑色の酒を美しく見せた「白熱瓦斯」とは全く趣きを異にする光景を現出させている。だから、その後、祇園や新京極の賑やかな所に行っても謙作の心持ちは気高くなっていて静かだった。その帰りにもう一度、その女の人を見ようとしたが、「未だ兩戸は開いて居たが、電球には緑色の袋がかけられ、中はしんとしてる」(傍点は志賀)て、おそらく外出しているとした。ここでは「七厘」の「火」、近代科学の産物である「電燈」の「光り」さえ、「若い美しい女の人」を一層美しく引き立てていたのである。

第三の二は、その翌朝、「草の葉には未だ露があり、涼しい風が吹いて居た」のである。「女の人」をまた見ることが出来、昨日のような美しさはないと感じたが、その動作にいい感じを受けた。ここでは、謙作が午前の涼しい博物館に出掛け、まずは「如拙の瓢箪鮎魚図」に惹かれ、「絵から何か話しかけて来るやうな感じを受けた」ことに注目したい。「瓢箪鮎魚図」とは、円くすべすべした瓢箪でぬるぬるした鮎(なまず)をおさえるには如何、という禅の公案を図示したものである。絵の中とはいえ、「瓢箪」と「鮎(なまず)」という自然のもの

が出てゐる。おそらくその後の展開からして謙作がまだ名さえ知らない直子と結婚まで辿り着く困難さを示しているのだろう。また、謙作は「支那人の描いた鷹と金鷄鳥の大きい双幅の花鳥図」にひどく惹きつけられた。これは、第四の十四で、謙作が大山の阿弥陀堂で「大きな蜻蛉」の姿態、そのしつかりした動作をよく思ったことと有機的な関連を持ち、かつて京都の博物館で「鷹と金鷄鳥の双幅」に心を惹かれたのも同じ気持ち（人間の「小人」の動作より上等）からだったろうと回想されているのである。こうして謙作は旧友の洋画家高井と二年ぶりに偶然再会し、まずは高井が謙作の「恋」（第三の一で「あの気高い騎士ドンキホーテの恋」に擬せられていた）の助力者となるのであった。第三の三で、高井は直子を見て行って「あれは君、鳥毛立屏風の美人だ」と割に適評と思える感じのいい評をしてくれたのである。

第三の四は、京都の宿での「三日目、それは珍しく明方から雨になり涼しい朝だった」で始まる。やがて夜行で来た信行と「雨に烟ぶる河原の景色を眺めながら」朝の食事をして、まずは前日に届いた信行の「要事」とした手紙の内容、お柴が天津で料理屋をしているその従妹のお才を手伝うため旅立つことなどを話し合うのだが、謙作の恋の助力者に、信行、信行の高等学校時代の友人の医学士山崎、そして京都では何かと手筈を作る便宜の多い公卿華族の石本が加わることになるのだった。この柔らかい「雨」は謙作の結婚話の方面で恵みを齎すものとしてあったといえよう。

第三の六は、京都に滞在していた石本（先にその老婆心を不愉快に思っていた（第一の三）が今は素直に頼ろうという気持ちになっていた）と一緒に東京に戻り、謙作がお柴と別れることをつらく思うまでが描かれている。だから鎌倉の信行を訪ねた際の帰りの汽車の中では「一人ぼんやりと薄暮の景色」を眺め、淋しい気持ちに誘われたのである。なお、謙作が信行を訪ねた折、そこに石本もいたが、信行は風邪をひいていて、謙作は信行のために「吸入器」を町に行き買って来、信行にそれを仕掛けてやった。さらに謙作と石本が一緒に帰ることになり、停車場で石本の知っている「医者」がいたので、石本が信行の事をその「医者」に頼んだのだ。このような場面にも医学医療に関わることが描かれていたのである。

第三の七の謙作は、大森でいつになく早く眼を覚ました。落ち着きのない気持ちの原因が明け方に見ていた夢だとする。夢は、まず近頃南洋から帰ったTを訪ね、

「雨中体操場」のような大きな建物の中に檻のようなものが沢山あって、その一つに「何十疋といふ栗鼠くらゐの小さな狒々」が目白押しに止まり木に止まっているのが面白かったという。この面白押しになった「何十疋といふ栗鼠くらゐの小さな狒々」の意味するものが非常に分かりにくい。夢の中とはいえ檻に入れられた小型の狒々の群れ、滑稽でもあるが無気味でもある。そして急に不安な気持ちに襲われTと別れ、上野の博物館の古風な門へ逃れて来、反逆人とされている彼が前を通り過ぎる兵隊の一人に脱営を促し和服と軍服とを取り換えて兵隊に成り済ましていたが、軍服の着方がまずく、刑事らに捕まったというものである。これは、母と祖父の不義の兄

という特異な出生のあり方が反逆人ということになり、今順調に進んでいる直子との結婚話が土壇場で駄目になるのではという潜在意識の反映と読みたい。こうして牛込の石本を訪問するのだった。それは「少し秋めいた静かな朝」で「苔のついた日本風の庭に朝日が斜めに差して」いて、「軒に下げられた白い文鳥」が「一寸濁ったやうな丸味のある声」で鳴き立てているのを聞いたのである。朝としての天候もよく、華族様の邸の瀟洒な庭の佇まい、そして観賞用としての飼養である「白い文

鳥」、頗るよい状況にある。石本が出て来て、S氏（石本の所謂旧臣でN老人の知り合いで京都市の市会議員をしている）からの手紙が「いい返事だ」と言い、N老人（直子の伯父）は謙作の不純な出生を気にするような人物ではないことも知り、この結婚話が「十中七分通りもう大丈夫だ」と考えたのである。

第三の八は、N老人との会見が気持ちよく済み、N老人夫婦に大変親しい感じを持つことが出来たあと、謙作の伊勢参りと亀山訪問を主に描いている。伊勢参りでの「五十鈴川の清い流れ」、「完全に育つた杉の大木」などを見てみないと分からぬ「気持のいい所」があったとする。翌朝、外宮では「林の中の池には何百となく野生の鴛鴦が水面に、又岸の木の水へ差し出した大きな枝に一杯にゐるのを見て、夢の中の場面のやうに思ひ、興じた」という。この光景は、夢の中の場面のようにだとされるが、「鴛鴦」といえば夫婦仲のよい鳥とされ、それが数多くいるのだから、謙作のやがて迎えるだろう結婚の吉兆とも読めるだろう。そして京都への帰途、亡き母の郷里である亀山に立ち寄る。「高台の至つて見すばらしい町」とされ、母の事（その幼時、親類など）を余りに知らなかった事に心づき、「夕陽が本丸の森を照ら」し、

「ぬる、で、だけ、がもう紅葉して青い中に美しく目立つて」(傍点は志賀) いるなか、「総ては自分から始まる。俺が先祖だ」と思いながら、「うるさく折れ曲がる急な山道」を、すでに秋らしく澄んだ池(「古い幽邃な池」)の方へトントンと小刻みに駆け降りて行ったのである。「ぬるで」(ウルシ科の落葉小高木)は山野などに見られ、秋には美しく紅葉するもので、「夕陽」に照らされた青い「森」で唯一特別に目立った光景は、「総ては自分から始まる。俺が先祖だ」という謙作の思いと重なるものがあるように思われる。

第三の九は、謙作がお栄を京都に迎え、俵で黒谷、真如堂から銀閣寺、法然院、松虫鈴虫の寺などを廻り、宿で泊まった翌日、京都駅で岐阜から来るお才らと合流、見送るシーンを描いている。ここで、見送り人の見知らぬ二人のうち、若い方の女が「六百円の電話」を持っていくことに注意したい。大正四年の国産ブランドピアノの価格は五百五十円、東京帝大や早稲田や慶応の授業料が年額五十円ほどだったことから、お才がその女が持つ「電話」が「お前さんの資本」と言うのは尤もなことで、近代文明の利器「電話」がまだ一般に普及されていないことが分かるのだ。今日から見て近代科学がいかに「電

話」方面で急速な発展を遂げたのかも頷けるのである。

第三の十は、謙作が新しい「寓居」に引っ越したのが「秋としてはいかに薄ら寒い風の吹く曇り日」であったとされ、雇い「婆アヤ」の仙が何かに話し掛けるので苛々したことからは始めている。が、その後、仙との関係は段々よくなった。謙作の直子との結婚も本決まりとなった。ところで、四条高倉の大丸の店では、最近「荻野はん」という京都で人気のあった飛行家が試験飛行をしているうちに墜死し、その落ちた小さい飛行機や「荻野はん」の遺品を展覧していたのである。このことに関連し謙作は巴里の龍岡に手紙を書き送っている。ここで阿川弘之が指摘した、大正四年一月三日の荻田常三郎墜死(A)、同年二月二十六日の沢田中尉の「モーリス・ファルマン」深草不時着(B)、四月京都大丸において荻田の遺品と「モラン・ソルニエ」の残骸展観(C)、という時系列において「(B)(C)が逆順になって」いて、「同年の出来事が、片方、二年あとの場所へ組み込まれている」理由を考えてみねばならない。私見によれば、荻田墜死に関することは作者志賀の衣笠村在任期のことで、二年ほど前倒しされこの長篇小説に嵌入されたのだと思う。京都での「荻野はん」の人氣が高いことはやはり飛行機讚美に繋がって

るし、それが墜落して無残なものとなったことは飛行機の危険性が感じ取られたことを意味し、この時点における謙作の近代科学の象徴である飛行機はその肯定、否定が相半ばするようになったと理解すべきであろう。だからこの第三の十の天候が「秋としてはいやに薄ら寒い風の吹く曇り日」から始められたのも納得が行く。

第三の十一は、謙作が上京し、或る「長閑のどかない日」に、妹の咲子と妙子連れ、鎌倉の信行を訪ね、皆で円覚寺へ行き、建長寺の半僧坊の山にも登り、妙子から「謙兄様」とした手紙とその結婚祝いの贈り物を貰い涙ぐんだことを描いている。ここに家族愛のテーマとともに、その日の天候と謙作の心持ちの相関関係が見られるだろう。

第三の十二は、十二月初め、敦賀から直子、母、兄が出て来て、S氏の家で謙作と直子が見合をし、南座の顔見世狂言へ行ったことから始まっている。この日は、謙作には直子の印象がよくなく（睡眠不足などで半病人の状態だった）、これまでの直子の美しいイルージョンが褪めかけてしまう。芝居がはねると、「戸外とには満月に近い月が高く」かかっていたのだが、謙作が一人になると「知恩院の大きな山門は近よるに従つて、その後ろに

月が隠れ、大きな山門は真黒に一層大きく」眺められたと描写されている。こうして謙作は、「自制出来ない悪い習慣」、「祖父からの醜い遺伝」などを思うのだが、「本統に慎み深い生活」に入らなければならぬと考えたのである。その場の情景と謙作の内面の有様が合致するように描かれている。

それから少しあと、直子ら親子三人が謙作の寓居を訪ねて来たことがあった。それは「曇つた寒い日の午後」として注意したい。この日の直子は見違えるほど美しく、生き生きして見えた。南禅寺の裏から疎水を通く人工の流れについて謙作と直子が歩く美しい場面も描かれる。が、直子から「文学」を知る方がいいのかわからない方がいいのかという問題が出されると謙作は少し困惑するのだった。「文学」は毒にも薬にもなる。それを謙作は知っていた。ここで「一疋の亀の子」が一生懸命に這っているさまを描き、謙作が「泥の固鞣かたまり」を拾い、「亀」の行く手に目がけて投げ、「甲羅に薄く泥を浴びたまま」歩き出していたことに着目したい。「亀の子」とはいえ、そのメタファーに「性」に纏わるものがあったはずである。結婚の直前、「文学」（毒の側面を考えた）と「性」の問題が絡んでいるのであり、謙作の心持

ちは晴々としたものではなく、やはり「曇つた寒い」ものがあつたとしていいのではなからうか。

第三の十三は、謙作と直子の結婚式があり、その後二人が、高台寺の貸家を見に行き不首尾となつたこと、祝い物の返しの品を五条坂の有名な陶工の家の一軒一軒に寄り「赤絵の振出し」を幾つか買ったこと、そして四条の轎船料理で夕食をとつたこと、その帰りに嫂のお政や栄花のことから懺悔の話題になり謙作が氣まずい思いをしたことなどを描いている。が、陶工の家での買い物あと、五条の橋があり、それは「かけ更へ」中で、二人は「飯橋」を渡っていることに注意したい。五条の橋が建て替え中ということは、古都京都にさえ近代化の波が押し寄せているとされているのである。

第三の十四は、謙作が直子との結婚式を終え、暫くして衣笠村に新建ちの二階家(借家)を見つけ、そこに引き移つたのは、「一月の、それは京都でも珍しく寒い日だつた」として始まっている。寒さが強調され、先行きに不穏なものを感じさせないわけでもない。が、二階の書齋の北窓からは、「正面に丸く松の茂つた衣笠山」、「その前に金閣寺の森、奥には鷹ヶ峰の一部」、「左に高い愛宕山」、「右に、一寸首を出せば薄く雪を頂く叡山」

が眺められ、謙作を喜ばせたのだつた。そして謙作より二つ程年下の友人末松が登場し、水谷も登場、「序詞」の根岸の家で祖父らによって盛んに行なわれていた「花合はせ」をやることになり、直子に猜があつた(第四の十六で直子に猜はなかつたと認識するが)と不信感を持つたのである。なお、末松から「飛行機の発動機では龍岡君が日本で一番いいんださうだね」という噂が出ると、謙作はそれを心から嬉しく思つたというのだから、まだ近代科学の発展、その象徴としての飛行機を肯定する思いがあつたといえる。やはり、「京都でも珍しく寒い日」の衣笠村への引越は、のちのちこの夫婦によくないことが起こる予兆としてあつたとしていいだろう。

第三の十六は、謙作夫婦の衣笠村の生活が平和で楽しく過ぎたことを語っている。四月の「祇園の夜桜」、「嵯峨の桜」、「御室の八重桜」、そして五月になつて「東山の新緑が花よりも美しく、赤味の差した楠の若葉がもくり／＼八坂の塔や清水の塔の後ろに浮き上がつて眺められる頃」になると、京都の町々も遊び疲れた(都踊り、島原の道中、壬生狂言の興行などの年中行事があつた)あとの落ち着きを見せて来るとしている。こうして直子の妊娠を知つたのである。秋になり、或る日、信行が不

意に訪ねて来たが、「それは晴れた気持のいい朝」とさされる。お栄の消息として「マラリヤ」に罹り、泥棒に入られて無一物になったが日本に帰るしかないとなると、謙作はお栄との再会を妙に嬉しい気がし、快活な気分になるのだった。これもその日の天候と謙作の気分が合致したものとなっている。

第三の十七は、十月下旬のある日、謙作が末松、水谷、久世などと「鞍馬の火祭」を見に行ったことを描いている。登りの道を「苔の香を嗅ぎながら冷えく」とした山気を浴びて「行くと、見物人たちが「提灯」を下げて行くのを時々「自動車」が前の森や山の根に「強い光」を射つけながら追い抜いて行き、「山の方からは五位鷺が鳴き乍ら、飛んで来る、そして行く程に、幽かな燻り臭い匂ひがして来た」と描写している。視覚、聴覚（五位鷺は「ごあっごあっ」と鳴く）、嗅覚がうまく使われ見事な光景を現出させているといえるだろう。そして「星の多い、澄み渡った秋空の下で、かう云ふ火祭を見る心持は特別」とされ、それは都会の騒がしい祭とは違い、賑やかさの中に「山の夜の静けさ」が「浸透つて居た」というのである。町を出ると急に「山らしい冷氣」が感ぜられ、京都へ入る頃は「叡山の後ろから白らく」と明

けて来、こうして謙作は「秋らしい柔らかい陽ざし」の中を衣笠村の家に戻って来たのである。男だけの祭りである「鞍馬の火祭」見物は、謙作が帰宅してすぐ知らされた男の児の誕生を予兆させるものだったとしていい。

第三の十八は、一転して、初児の直謙が生後八日目で「丹毒」に罹ったことを描いている。ここでは、二人の医者が対照的に登場している。近所の医者は見すばらしい小男で薄い天神髭を生やしていて、一種の消化不良だと誤診したのだった。一方のK医師は半白の房々とした口髭を持った大柄な人で、「丹毒」と診断したのである。「丹毒」は大人の病気としてもかなり困難な病気で、「蜂窩織炎」それから「膿毒症」とまで進んだら致し方ないと言った。近代科学の一分野である医学医療のことが描かれている。直子は実家の近くで「丹毒」で亡くなった赤ちゃんがあるので心配で仕方ないと言う。が、謙作はそれが四、五年前のことだと知ると、「今日の注射液」の出来ていない頃だと言い、医学の進歩と信頼の置ける医者が早く気が付いたので食い止められるかもしれないと言って直子を励ますのだった。

第三の十九は、それから二週間経つうちに赤児は「蜂窩織炎」を起こしたことから始まっている。謙作は直子

の母から「鬼門の柳」とされたものを植え替えるという御幣担ぎまでした。そして、K医師と同じ病院の外科医とで一か八かの手術をし、謙作には十中八九駄目と思われたものを、「食塩注射」と「酸素吸入」でその命が絶えるのを食い止め、謙作自身も赤児に酸素をかけてやったのである。が、どうしても助かるとは思えなかった。苦しむ赤児の様子から、安楽死の問題まで話題となる。仏蘭西ではそれが許されているが、独逸では許されておらず、日本は独逸と同じ考えだと医者と言ったのだ。こうして赤児は発病後一ト月で死んでしまったのである。近代科学の進歩、医学医療方面では大切な人間の生命に関わるので、謙作がその進展を願っていたことは疑いようがない。が、謙作はこれまで「暗い路」を辿って来たことから、「曙光」を見たと思うと苦しめられる、喜ぶべき初児の誕生からその死に遭い、運命の悪意を感じないではいられなかったのである。

#### 四

第四の一で謙作はお栄を朝鮮の京城まで迎えに行くことになり、第四の二は、お栄が大連で「瘡」(マラリヤ)

の発作の際、それを「塩酸キニーネ」(マラリヤの特効薬)で治めていたという叙述があり、ここにも医学医療方面での近代科学に関わる事柄が記されていたことには留意すべきだろう。さて、謙作の京城での生活は、開城から平壤へ一泊で出掛けた以外は、「或る晴れた日」に、お栄とは清涼里(京城市東北の地域)の尼寺に精進料理を食べに行ったくらいだとするが、その途中、「山の清水の湧いてる所」で白髯の老人が中心となった朝鮮人の家族のピクニックの光景を見て、謙作は「何か親しい感じ」を受けたのだ。よい天気、山の清涼感を与える自然のもとでの家族のピクニック、『暗夜行路』には家族愛のテーマも随所に描かれているのである。が、謙作は「南山から北漢山を望んだ景色」が好きで二度そこへ出掛けて行ったという。「南山」は京城(ソウル)にある或る地域であり、「北漢山」はブクハン山(ソウルの北にあり標高八三二m)である。志賀は朝鮮に行ったことはなく、柳宗悦からの情報をもとにしているが、とりわけ「南山から北漢山を望んだ景色」が美しい景観であることを、謙作にそこへ二度行かせていることで強調させたものと思われる。

第四の三は、謙作がお栄を連れて京都に帰り留守中の

直子にただならぬ事が起こったことを謙作が察知するま  
でを描くが、「蒸々暑い日中の長旅で、汽車の中は苦し  
かつた」とされる。この天候は、近代文明の産物の「汽  
車」の中という状況も併せ考えると、謙作によからぬこ  
とが齎される予兆だったとも読めることになる。こうし  
て、第四の四は謙作が直子を問い詰め、直子と要（N老  
人の息子で直子の従兄に当たる）に過失（不義）が起こっ  
たことを嗅ぎ当てるまでを描く。第四の五は、視点が変  
わり、ここで直子と要の幼時体験である「亀と鼈」と  
いう卑猥な遊戯のことが描かれ、謙作の留守中に直子と  
要に過失（不義）が起こった場面も描かれたのである。

第四の六は、その翌日、謙作が一条通を東に急ぎ足に  
歩いている場面から始まるが、この日は「南風は生暖か  
く、肌はじめくし、頭は重かつた」とされる。直子を  
憎めないから赦したのだなどと前夜直子に言ったことを  
頭の中で繰り返していた。今、謙作は、岡崎の下宿に末  
松を訪問しようとしているのだが、乗った「電車」の  
「戸外も夕方のやうに灰色をして」いて、「電車」の中は  
「一層薄暗く、その上、蒸々して、長くゐると、嘔気で  
も催しさうに」思われ、暫くして「湿気と人いさげ」  
（傍点は志賀）から耐えられなくなり、「電車」を飛び降

りて「人力」（傳）に乗り換えたのだった。「電車」も近  
代文明の産物の一つだが、今のような謙作の精神状態で  
は耐え難い不快を与えるものとなり、かえって前近代的  
な人力車の方がよかつたのであった。謙作は末松を外へ  
連れ出すことにするが、「近く見える東山は暗く霞み、  
その上を薄墨色の雲が騒しく飛んで」いる「変に張りの  
ない陰気臭い日」だったとしている。間もなく末松が来  
て、会話を交わすが、やがて謙作は「不図異様な黒いも  
のが風に逆らひ、雲の中に動いてゐるのに気がつ」き、  
その瞬間、「恐怖に近い気持」に捕えられた。その「異  
様な黒いもの」とは「飛行機」であり、今や「汽車」や  
「電車」とは比べものにならないくらい近代科学の進  
歩の象徴としての乗物として形象化されていたのである。  
その日の飛行機は「陸軍最初の東京大阪間飛行」の機体  
であると二人は新聞で知っていた。その機体が段々に下  
がって行き、知恩院の屋根とすれすれにその彼方に姿を  
隠してしまったのである。「屹度落ちたぜ」として二人  
はその方面に急ぎ足に歩いて行った。この時点で、「飛  
行機」は謙作のなかで否定に傾斜したとしていいだろう。  
第四の七で謙作はようやく、末松に「露骨にいへば水  
谷の友達で直子の従兄がある。それと直子が間違ひをし

たんだ」と打ち明けたのだった。「密雲不雨」という言葉が謙作から現在の気持ちとして口に出されたが、その日の天気合、号外で知った先の「飛行機」の深草不時着に至るまでの実際の様子を目撃、三者が密接に関連し合っ  
て描かれていて卓抜な描写部分を形成している。が、とりわけ近代科学の発展の象徴としての「飛行機」の否定への傾斜を見せていることを読み取らねばならぬだろう。

第四の八は、謙作直子夫婦の生活は外見だけ平和な日が過ぎていたが、二人に「全集中抱合へない空隙」が残され、秋頃から、謙作は裁縫缺で直子の着ている着物を襟から背中まで裁ち切るなどの発作的癩癩を起こすようになっていたことから始まっている。それで、日頃の自分を取り戻すため、謙作は久しく遠退いていた古社寺、古美術行脚を思い立ち、晩秋の「景色も美しい」時に高野山、室生寺などに旅をし、少しずつ日頃の自身を取り戻して行った。そして翌年一月末に大和小泉から法隆寺に行き帰って来ると女の児が産まれていて隆子と命名したのだった。

第四の九は、「謙作は毎年春の終りから夏の初めにかけ屹度頭を悪くした」の一文で始まり、謙作がその気候にその気分が影響を受けやすく、よからぬ事が起こる予

兆を示している。こうして謙作、末松、お栄、赤児を伴う直子と宝塚にいわば家族旅行に行くことになり、京都七条駅で、謙作が動き出した汽車の上から遅れて歩廊を小走りに馳けて無理に乗ろうとする直子の胸を発作的に突き、怪我を負わせてしまうという事件を起こしてしまうのだった。謙作は「気候のせるですよ」とお栄に言うが、直子を感じの上でどうしても赦せなかった（寛大でない俺の感情・第四の十）のであり、そのため、第四の十では、謙作は「自分の精神修養とか健康回復」の目的で、伯耆大山に行くことにするのだった。

第四の十一から十三までは、謙作が京都から大山の蓮浄院に辿り着くまでの旅の有様を描いている。

第四の十一は、まずは、謙作が花園駅から鳥取行の汽車に乗り、「嵐山あざなから亀岡かめおかまでの保津川たけふらの景色は美しかった」としている。が、その「景色」の美しい眺めよりも「保津川」の「青々とした淵」を見るとそれに浸ってみたかったという。清涼感のある自然との直接的な身体みの接触を思うところに、ひいてはその精神まで浄化されたいという願望がうかがえるのではなからうか。その日は城崎に泊まった。如何にも温泉場らしい情緒が染しめた。殊に「麦藁あわらを開いて貼った細工物が明るい電燈の下

に美しく見えた」とする。「御所の湯」の深い湯槽に浸かるが「強い湯の香」にその気分の和らぐのを覚えたのである。翌朝は寝不足で六時頃に起き、ぼんやりした頭で宿の芝生の庭に出て見た。すぐ眼の前に「山」が聳え、「その山腹の松の枯枝で三四羽の鶯が交々啼いてゐた」のだった。「鶯」は「びーひよろひよろひよろ」と鳴くが『暗夜行路』ではこれ以前同様、鳥類の鳴き声は記されない。また庭の「池」には「青鶯が五六羽」、首をすくめて立っていたという。「青鶯」(大形のサギで全長約1m)が「五六羽」も宿の「池」にいるとは珍しいことにも思え、それ故に謙作が「未だ夢から覚めないやうな気持だった」とするのも尤もで、美しい光景を現出させている。

その日の謙作は香住駅まで汽車で行き、応挙寺に立ち寄った。応挙の描いた「書院の墨絵の山水」を殊によく思い、「呉春の四季耕作図」は濃厚な感じで気持ちよかったとするが、「蘆雪の群猿図」は奔放だが破綻が見られるとし、応挙の弟子である呉春と蘆雪との対照を面白かったとしている。「沈南蘋の双鶯図」は、浪の間に頭を出している岩の上で子を産もうとして上を見上げている「雌鶯」と、上の岩でそれを見下ろしている「雄鶯」

の視線が合っていて、それぞれの態度も興味があつたとする。これらの自然を描いた古美術品の鑑賞に謙作は興じたのである。また、「左甚五郎が彫つた龍」が屋根にあると小坊主が言うので見ることにするが、「戸外は何時の間にか曇つてゐて、謙作が「これは実物大ですね」(龍は想像上の動物で雲雨を自在に支配する力を持つとされる)と冗談を小坊主に言うが通せず、そこに「大粒な雨」が謙作の顔に当たり、「此龍が雨を呼んだのだ」と冗談まで言ったのである。このようなユーモアも出されていて、謙作の心にゆとりが生じているのがうかがえる。

第四の十二は、その晩に謙作は鳥取に泊まり、宿の女中から「多鯰ヶ池の伝説」や「湖山長者の伝説」を聞かされ、夜中に「驟雨の音」を聞いて、明日の「天気模様」はいいかも知れないと思つたことから始まる。「翌日は果していい天気だった」とする。「上井、赤崎、御来屋」と、謙作は汽車の窓から飽かず「外の景色」を眺めて来た。「二尺程に延びて密生した稲」が風もないのに「強い熱と光」とのなかに揺れて見えると、謙作は「ああ稲の緑が煮えてゐる」と興奮しながら思つたのだ。この場面では、「稲の緑」が「押し合ひ、へし合ひ歎喜の声を上げてゐる」という擬人法表現が用いられ、「盛夏の

力」というものを描出して、極めて印象に残る卓抜な自然描写がなされているといえるだろう。謙作は「大山といふ淋しい駅」で汽車を降りた。車夫によると、山まではお六里あり、「俵」で行けるのは初めての三里で、あとは徒歩で行くのだという。「俵」での道中、片側半分ほどの軒並みは、三叉に竹竿を渡し、それに「白い無闇と長い物」が一杯に掛けてあり、それは「干瓢」だというのだった。三里来て、老車夫は謙作の荷を背負い、「広々とした裾野」の「ゆるい傾斜の原」を二人はゆっくりと歩いて行くのだった。

第四の十三は、「竜胆、撫子、藤袴、女郎花、山杜若、松虫草、吾亦紅、その他、名を知らぬ菊科の美しい花などの咲乱れてゐる高原の細い路を二人は急がず登つて行つた」という一文から始まる。具体的には七つの植物の名を並べているが、その花の色を言えば、竜胆の青紫色、または紅紫色、撫子の桃色または淡紅色、藤袴の淡紫色、女郎花の黄色、山杜若の青紫色、松虫草の泡紫色、吾亦紅の暗紅紫色とカラフルである。また、「放牧の牛や馬が、草を食ふのを止め、立つて此方を眺めてゐた」という擬人法的表現の文が続いている。さらに、所々に「大きな松の木」の「高い枝」で「蟬」が力一杯鳴いていた。

高原の光景として、読み手の眼に浮ぶようなスケールの大きさが感じられるものとなっている。やがて「分けの茶屋」に着き、ひと休みする。茶屋の客用の間の真ん中には「八十近い白髪の老人」が「広い裾野から遠く中の海、夜見ヶ浜、美保の関、更にそと海まで眺められる景色」を前に静かに腰を下ろしていた。「脊が高く丁度風雨にさらされた山の枯木のやうな感じがした」とする。

この爺さんは接客の用が済むと、また元いた場所に戻り、腰を下ろして、「毎日見てゐる景色」を飽かず眺めていた。この老人は「山の老樹」あるいは「苔むした岩」に譬えられ、「樹」が考え、「岩」が考える程度にしか考えていないだろうという気がして、謙作にはその「静寂な感じ」が羨ましかったという。先に老車夫が話した昔の白髪の強盗の「恐ろしい爺」とは対照的に描かれている。この「分けの茶屋」の老人は、謙作の望む「静寂な感じ」を持つ。羨望の対象としてあるといえよう。が、謙作はやがて大山の中腹で眼下の夜明けの光景を眺めることになり(第四の十九)、ここはさすがに「樹」が考え「岩」が考えるというものではないが、「分けの茶屋」の老人と同じような状況、いやその数倍良好な状況に置かれるので、ここはその先取りの意味を持つ場面としてよい

だろう。二人は茶屋を出、「地蔵の切分け」という広い河原を越し、蓮浄院に到着、謙作は離れの書院作りの三間とも借りて滞在することになったのである。

第四の十四は、大山生活において近くの森の中にある阿弥陀堂に行き過ごしたことを中心に描いている。「大きな蜻蛉」が飛ぶ様子を見て、「翡翠の大きな眼、黒と黄の段だら染め、細くひきしまつた腰から尾への強い線、——みんな美しい。殊にその如何にもしつかりとした動作は自然が造つたものである。そして水谷のような「人間の小人」の「動作」と比べ、「此小さな蜻蛉」の方が上等な気がするのだった。また、石の上で「二匹の蜥蜴」が後ろ足で立ち上がったたり、跳ねたり、からまり合ったり、「軽快な動作」で遊び戯れるのを見て、謙作も快活な気分になった。ここでも「二匹の蜥蜴」の「動作」に不自然さがないことに気持ちのよいものを感じたのだろう。さらに「鶺鴒」は駆けて歩く鳥で、決して跳んで歩かないのに気づいたのであった。「葉の真中に黒い小豆粒のやうな実を一つづつ載せてゐる小さな灌木」には仏像のイメージが重なったのであろうか、「如何にも信心深く」思われたという。こうして「青空の下、高い

所を悠々舞つてゐる鳶の姿」を仰ぎ、人間の考えた「飛行機」の醜さを思うのだった。ここで近代科学の象徴の「飛行機」は完全に否定される。人間は、翼を持たないので鳥に擬した飛行機を發明し發展させて来た。それは「自然の意志」に反することだったのだ、というような思いに到達したのである。また、「魚のやうに水中を行く」ことは「自然の意志」であろうか、としたところに注目すれば、具体的には「潜水艦」が想定される。先に第二の四の象頭山の空想を考察した際に、第一次世界大戦で重要な兵器、すなわち「潜水艦」(ドイツの潜水艦Uボートが有名)だけが抜け落ちていたが、ここで「潜水艦」の否定、批判が暗になされていることに気づくのだ。『暗夜行路』に底流するもの一つに、時任謙作の過ごした時代には第一次世界大戦があり、「飛行機」や「潜水艦」などの兵器の否定、近代科学全般への否定ではなく、それが悪い方面に利用、開発されやすい、戦争反対のメッセージが込められていたのだと思われる。

第四の十五は、蓮浄院での生活で、お由が生神様となっていて謙作が不思議なエクスタシーを感じた妙な夢が語られてはいるが、その翌朝、「軒に雨だれの音を聴きながら眼を覚まし」、「戸外は灰色をした深い

霧で、前の大きな杉の木が薄墨色にほんやり僅にその輪郭を示してゐた。流れ込む霧が匂つた。肌には冷々ひえく気が付がよかつた。雨と思つたのは濃い霧が萱屋根の滴たぎとなつて伝ひ落ちる音だつた。山の上の朝は静かだつた。鶏とりの聲が遠く聴えた」という自然事象、自然環境との関わり注目すべきだと思ふ。ここには、聴覚に始まり、視覚、嗅覚、そして触覚、最後にまた聴覚が関連し、濃霧に包まれた静かな山の上の朝の情景が謙作に快いものとなつていたのである。

第四の十六は、謙作が直子にこの旅は自分の気持ちの純化が目的だつたのだが、それが案外早く来たと手紙に書いたことから始まる。また、その手紙にこの書院窓の所で、「蠅取蜘蛛」が「小さな甲虫かちゅう」を捕り、到頭、それが成功しなかつた様子を精しく書いて置いたものを同封したことをいう。謙作は外出し、「山の臭ひ」にいい気持ちだし、親しくなつていた屋根屋の竹さんが仕事をしている場所では、「枝を拵おぼろげた大きな水槽」がその刃帯をおおい、「その葉越しの光り」が柔らかく美しくかつたとしている。竹さんとの会話の途中で、手洗石のふちに「何か分らない、見馴れない虫」が、何千だか何万だか、ウヨウヨと這い廻っているのを見た。これは、生来

の淫婦を妻にする竹さんの身に何か不吉なこと、悪いことが起こる予兆として描かれたものだと思ふ。

第四の十七は、竹さんの女房が痴情の争いで、情夫と一緒に重傷を負い、危篤だという知らせがあつて、竹さんが下山したことから始まる。叡山に次ぐ天台の霊場と言われる山に来てこういう事を聞かされるのは興ざめだつた。が、謙作は阿弥陀堂に行く。ここでは、人は殆ど来ず、「小鳥、蜻蛉、蜂、蜥蜴としかげなど」がたくさん遊んでゐた。時々、「山鳩」(キジバト)の鳴き声が「近い立ち木」の中から聴こえて来たのだつた。ここでも「山鳩」の「ででばーばー」という鳴き声の表記はない。現代的観点からすれば、『暗夜行路』全篇を通して人工の物が発するその音は表記し、自然の鳥類などのその鳴き声はいっさい表記せず、読者に想像を要請するという自然環境の保全の願いが込められていたとも考えられるのである。

謙作はその帰途、不二門院という荒寺へ行った。暗い庫裏の長い土間に「大きなながし」(傍点は志賀)があり、その上に「畳一畳程の深い水溜みづための枡ます」があつて、半分は屋外に出ていて、笥から来る「山の清水しみず」がそれから滾滾こんこんと溢れていて、「杉の枝を漏れる夏の陽」が、山砂の溜こみまった底の方まで「緑色に射込み」、非常に美し

く、総てが死んでしまったようなこの寺で、ここだけが  
独りいきいきと生きていたとしている。「水」と「光」  
のコラボレーションというべきか、自然は非常に美しい  
情景を現出させることがある。

第四の十八は、竹さんの家の消息が分からぬまま二、  
三日が経ち、竹さんのいつもの仕事場に行ってみると、  
手洗石に群がっていた気味の悪い毛虫は今は一匹もいな  
くなり、そこには「白い鶺鴒」が遊んでいたことをいう。  
が、のちに竹さんの女房は死に、竹さんは殺した奴に狙  
われはしまいかと心配だという。明日、謙作は大山に登  
ることにしたが、竹さんの不快な話を聞いたことなどか  
ら、寝つかれず、睡眠不足となったのである。

第四の十九は、『暗夜行路』全体のクライマックスシー  
ンを形成しているといえる。夜中の十二時頃、謙作は山  
登りの連れとなった大阪の会社員たちと蓮浄院を出発し  
た。「空は晴れ、秋のやうな星がその上に沢山光つてゐ  
た」のだが、謙作は昼食の鯛にあたってらしく体調不良  
で落伍してしまう。「萱」の生えた中に入り、「山」を背  
にして腰を下ろした。「冷々した風が音もなく萱の穂を  
動かす程度に吹いてゐた」のだった。疲れ切ってはいる  
が「不思議な陶酔感」で心身ともに「此大きな自然」の

中に溶け込んで行くのを感じた。これまでは「吸込まれ  
る感じ」で快感と抵抗感もあるものだったが、今の「陶  
酔感」は初めての経験だった。夜鳥の声も聴こえない静  
かな夜で、死の恐怖も感じなかった。どれだけの間か眠  
り、ふと眼を開いた時は「四辺は青味勝ちの夜明け」に  
なっていた。「空」も青味を帯びて来た。青色からのイ  
メージは人それぞれ異なるだろうが、この場合の謙作は  
「慈愛を含んだ色」と感じたのである。「山裾の靄は晴れ、  
麓の村々の電燈」がまばらに眺められた。米子の「灯」、  
境港の「灯」も見え、美保が関の「燈台」も時々強く光っ  
ていたのだった。「電燈」や町々の「灯」は人工のもの  
で人間の生活に必要な近代科学が産んだものである。こ  
こは、調和が取れているので近代科学の否定には繋がら  
ない。暫くして謙作が振り返って見た時、山頂の彼方か  
ら湧き立つように「橙色の曙光」が昇って来たのだった。  
周囲は明るくなる。「大きな山独活」があちこちに遠く  
の方まで所々に立っていた。「独活」(ウコギ科の多年草  
で茎は約2m、夏に多数の小花をつける)の大きいもの  
で、それもあちこちに立っていたという。「その他、女  
郎花、吾亦紅、萱草、松虫草なども萱に混つて咲いてゐ  
た」とあり、この擬人化されたような「大きな山独活」

は異質で、まるで精霊を宿した存在のように私もには感  
じられたのである。風物の変化は非常に早く、太陽は眼  
下の景色を明るくさせ、村々には「白い烟」が所々に見  
え始めたというのだから朝餉の準備など日常の生活が開  
始されたのである。謙作は、今見ている景色に大山が  
「影」を映していることに気づき、大山の「影」が地引  
網のように手繰られて来るのを平地に眺め、それを「稀  
有の事」として「或る感動」を受けたのだった。郭南燕  
は、綿密な考証から「大山の影の移動に虚構がある」  
(実際の移動の速度は遅くスピード感はない)とし、三  
木利英が指摘した「国引神話」との関連から、「この天  
地創造の雰囲気は、出生の呪詛を連れて、「総ては自分  
から始まる。俺が先祖だ」と決心した謙作に、視覚的な  
〈世界の始まり〉を与えることになる」と論じたのであ  
る。首肯できる見解である。が、眼下に大山の「影」が  
地引網のように手繰られて来る光景は、その大山の大き  
然の中に溶け込んでいる芥子粒ほどに小さい謙作自身の  
存在を自らが手繰るようで、身体的にも実感させられる  
ことに繋がり、まさしく「稀有の事」で至福の境地に達  
したものであったとていいだろう。

本多秋五は「この小説の主題は、狭苦しく窮屈で殻の

堅い自我の始末の問題である」としたが、このような  
「影」大山をクライマックスとした大山の夜明けのシー  
ンは、主人公謙作の「人格変容」の「きっかけ」となる  
重大な体験であったといえ、さらに次の第四の二十で病  
床にある謙作に「新しい人格として再生」が予測される  
と読むことも可能となるのである。

第四の二十は、謙作が大山を下山して病床に就き、や  
がて駆けつけて来た直子との対話、直子視点に転換して  
のその内面の思いを描き、エンディングとなる。ここで  
は、近代科学の一分野である医学医療のことがまたも扱  
われていることに注目すべきである。その夜に来た「村  
の医者」(「年寄った小さな医者」とされる)は、「急性  
の大腸加多児」と診断した。翌日の昼頃に「食塩注射」  
の道具などを持ってやって来た「余り若くない代診」は、  
「強心剤の注射」も謙作の股に刺し、謙作は苦痛から涙  
を出していたが、結局は「急性の大腸加多児に違ひない」  
と診断され、そう恐ろしい病気ではないが、一度米子の  
「〇〇病院の院長さん」に診て貰ってはどうかとしたの  
だった。直子の懇願もあり、明日の午後には米子の「〇  
〇博士」に来て貰える手筈となった。結局、謙作は死ぬ  
か生きるか分からないところで終わっている。が、大抵

の読者は謙作は生き延びるとするだろう。『暗夜行路』における近代科学の側面を見れば、先の初児直謙の「丹毒」のケースとは逆に謙作が助かるには、医学医療方面への信頼、その進展に期待するしか術がないとなっているのである。

注

- (1) 平野謙『暗夜行路』論（『群像』、一九六八（昭43）・三、四、六）。のち、『わが戦後文学史』（講談社、一九六九（昭44）・七）に収録。
- (2) 阿川弘之『暗夜行路』重箱帖（『志賀直哉 下』、岩波書店、一九九四（平6）・七）、のち、『志賀直哉（下）』、新潮文庫、一九九七（平9）・八）に収録。
- (3) テッド・グーセン（岸田エリス俊子訳）「ふれ合うリズム——志賀直哉の『和解』と『暗夜行路』における自己と自然——」（平川祐弘・鶴田欣也編『アニミズムを読む 日本文学における自然・生命・自己』（新曜社、一九九四（平6）・一）所収論文）
- (4) 拙稿『『暗夜行路』における原風景とその関連テーマ——「序詞」の形成とその遠心力——』（『文芸研究』第八十五号、二〇〇〇（平12）・二）。のち、拙著『志賀直哉 暗夜行路の交響世界』（翰林書房、二〇〇七（平19）・七）に収録。
- (5) 森永卓郎監修『明治・大正・昭和・平成 物価の文化史

事典』（展望社、二〇〇八（平20）・七）

- (6) 須藤松雄『増訂版志賀直哉の文学』（桜楓社、一九七六（昭51）・六、初版は一九六三（昭38）・五）
- (7) 鹿野達男『志賀直哉 芸術と病理』（金剛出版、一九七五（昭50）・三）
- (8) 飯倉章『第一次世界大戦』（中公新書、中央公論新社、二〇一六（平28）・三）
- (9) 注（5）に同じ
- (10) 注（2）に同じ
- (11) 阿川弘之（注（2）（10）に同じ）は、「五条大橋掛け替え工事が終って、近代的な橋に生れ変わったのは、明治四十四年十一月二十九日、それ以後、昭和五年の大水で流失して再建が必要となるまで、仮橋を設けての補修工事というようなことは行われていない」といい、さらに奇妙なことに、日本橋と五条大橋と、「橋梁工事の關係する部分だけは、主人公の行動の年次が、あと先ほぼびったり事実と合うのである」と指摘している。日本橋と五条大橋の「橋梁工事」は近代科学の発展による都市の近代化を表象するもので、作者志賀がこの二つの場面を有機的に関連づけるために意図的に配置し、描いたもののように私には思われる。
- (12) 三木利英『志賀直哉と大山——こころの軌跡を求めて』（錦正社、一九七八（昭53）・五）
- (13) 郭南燕『志賀直哉で「世界文学」を読み解く』（作品社、二〇一六（平28）・三）
- (14) 本多秋五『志賀直哉（下）』（岩波新書、一九九〇（平2）・二）